

本ファイルは、次の講演の原稿の本文に講演資料の一部を組み込んだものです。

公開講演会「動的文法理論の考え方と事例研究」

講演者：梶田優 (上智大学名誉教授)

場 所：名古屋大学 国際開発研究科棟 8階 多目的オーディトリウム

日 時：2003年9月6日(土) 14:00-

講演原稿初出

『コーパスの利用による現代英語の語彙構文的研究』

平成13年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)

(研究課題番号 13410132) 研究成果報告書 (研究代表者 大名力), pp. 67-121.

講演は配布資料を基に進められましたが、書き起こし原稿では、稿末に付けた配布資料で参照されている個所を探しながら読むのは大変であるため、読む際の便宜を考え、資料の該当個所を (一部手を加え) 本文に組み込んだものです。

オリジナルの講演原稿はウェブサイトからダウンロードできます。

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/ohna/papers/kajita/kajita2004.pdf>

本ファイルの公開については講演者から許可を得ていますが、正式のものではないため、研究で引用される場合には必ず原典の方をご使用ください。参照個所および挿入位置は大名の判断によるもので、講演者によるものではありません。他にも誤りがある可能性もあるので、研究で利用される際には、解釈も含め、必ず該当個所を原典でご確認いただくよう、お願いいたします。原典の稿末に付けられた配布資料は収録していませんので、配布資料については上記ファイルのものをご覧ください。

なお、挿入した参照個所のチェックには、小島ますみ、末岡敏明、藤正明、山内昇の各氏にご協力いただきました。この場を借りて、お礼申し上げます。

大名力

2013/1/1

公開講演会

「動的文法理論の考え方と事例研究」*

講演者：梶田優（上智大学名誉教授）

日時：2003年9月6日（土）14:00～

場所：名古屋大学 国際開発研究科棟 8階 多目的オーディトリウム

<司会>

それでは、定刻になりましたので、梶田優先生の講演会を始めたいと思います。私、司会を務めます大室と申します。宜しくお願い致します。今日は暑い中お集り頂きまして、どうもありがとうございます。

今日ご講演いただく梶田先生のごことは皆さんよくご存知のことと思いますが、見渡しますと若い学生さんも来ておられるようですので、簡単にご紹介をさせていただきます。

梶田先生は東京教育大学の文学部に学ばれ、東京教育大学の大学院、英語学英米文学専攻に進まれ、後期課程の途中から、Princeton大学のOriental Studiesの講師になられ、それからPrinceton大学の博士課程（言語学）に進まれ、そこでPh.D.を取得されて、母校の東京教育大学に戻られて、教鞭をとられました。英語学担当です。東京教育大学はご承知の通り、その後、閉学になりましたので、先生は東京学芸大学に移られ、それからその途中でカナダのBritish Columbia大学に客員教授で一年間教鞭をとられました。それから上智大学に移られ、今年の3月、定年退職されました。その間ずっと、教育大時代から東京英語学談話会の中心的なメンバーとして我々を指導されてきました。

主な業績には、もう言うまでもなく博士論文であります*A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English*があります。これは市河賞をとられ、その後、『文法論II』、『変形文法理論の軌跡』を書かれています。

1977年に“Towards a Dynamic Model of Syntax”というSEL¹の5号に載った論文で、今日話されます、動的文法理論を提案します。次に「Chomskyからの3つの分岐点」、これは『言語』に載った論文ですが、それから太田先生の傘寿の論文集²に載りました“Some Foundational Postulates for Dynamic Theories of Language”という論文を書かれています。で、Chomskyと同じようにUGは仮定するわけですが、Chomskyが大人の文法のみに基づいて可能な文法を定義するのに対し、先生の場合は、ある言語のある中間段階の次の段階でどういうものが可能になるか、それを通じて、可能な文法を定義するというように、UGの与え方自体を変える、

* 本稿は、平成13年度～平成15年度科学研究費補助金「コーパスの利用による現代英語の語彙構文的研究」（基盤研究(B)(2)（研究課題番号13410132）代表：大名力）、平成14年度～平成16年度科学研究費補助金「コーパスを用いた現代英語のコロケーションの記述的研究および結合度測定方法の研究」（基盤研究(C)(2)（研究課題番号14510514）代表：滝沢直宏）、平成15年度～平成17年度科学研究費補助金「英語における自動詞の他動詞化に関する大規模コーパスに基づいた生成理論的研究」（基盤研究(C)(2)（研究課題番号15520309）代表：大室剛志）の共催で行われた公開講演（司会：名古屋大学 大室剛志）を書き起こしたものに、講演者が加筆・修正を加えたものである。講演は黒板を使って行われたため、音声の復元だけでは理解困難な部分があり、ハンドアウト本体（稿末に掲載）2ページD1指示詞、D3格、D6虚辞、の各項目、および出力説の問題点の一般形（under-differentiation, over-differentiation, その他）に該当する部分は本稿では割愛されている。脚注は大室剛志・大名力による。

¹ *Studies in English Linguistics*. Tokyo: Asahi Press, (1972-1983).

² M. Ukaji et al. (eds.) *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*. Tokyo: The Taishukan Publishing Company.

という考えを示されております。今日はその話をじっくり三時間ほどかけて、先生のペースで、途中質問などを受けながら、やられるということです。

では梶田先生、宜しくお願いします。

<梶田先生>

ご紹介どうもありがとうございました。私、名古屋には30年ぐらい前に、文学部の方ですけど、数年間続けて集中講義に伺ったことがあります。荒木一雄先生が名古屋の方にお移りになられて間もなくのことで、1970年代の半ば頃ですか。そのころは、日本の英語学では、教えてらっしゃる先生方が、大抵、伝統文法と、それから構造主義の言語学の枠組みの中で訓練を受けられた人たちで、その人たちが新興の学問である生成文法を、なるべく理解して使えるところは使おう、というような姿勢で生成文法もやっていたわけなんです。私の集中講義でも、その主旨に沿って当時の生成文法の理論の話をしたわけですけども、同時に自分が満足していないところがあるという話もかなりしつこく致しました。ちょうど先ほど紹介に出て来た77年の論文、“Towards a Dynamic Model of Syntax”というのを書いていたころだったものですから、そこで述べたこと、あるいはその背景になっているようなことを、かなりしつこく話を聞いてもらいました。

で、現在事情がどれくらい変わっているかと考えてみますと、伝統文法に基盤があるというところは、日本の英語学者は皆それは共通で、現在でも基本的には変わっていない。というのは、学習文法でもって、かなりきっちりと、知らず知らずのうちに伝統文法的な言語の捉え方というのを仕込まれている。それに比べて、アメリカなどの言語学界では、しばしばそういう意味の伝統文法の訓練は経ないで、例えば、数学をやった人がいきなり言語理論をやりだすとかですね、それからまた、英語が世界語ですから、日本人が英語を学ぶようなやり方でアメリカ人が外国語を学ぶということも日本におけるほどではないわけですから、だから、伝統文法的なもの、つまり、一つ一つの言語を詳しく隅々まで見ていって、その中から言語の性質を捉えていこうとするような、そういうアプローチというのは割と弱いのではないかと。もちろんそれは皆がそうということではなくて、そもそもChomsky自身、伝統文法をものすごくよく知っているのですけれども、全体的な土壌としてはそういう傾向があるろうかと思いますが、日本の場合はとにかく大本は伝統文法、それぞれの言語の事実をきっちり見ていくところから出発しているっていう、それは現在でも変わらないわけです。70年代に私がこだわっていたのもそのところで、当時の生成文法の理論では伝統文法の実質的な内容の大半が表せない。一般文法理論を明示的、体系的、实在論的なものにするという基本方針や「可能な文法」をできるだけ狭く定義するという当面の研究目標には全面的に賛同できるけれども、具体的に提案された理論そのものは、伝統文法で示されている言語の実態から余りにかけ離れている。

それで、この問題を解くにはどうしたら良いかということで、70年代の半ば頃に、後で見ると動的な考え方を取り入れないと、二進も三進も行かないんじゃないか、というふうに考えたわけですが、生成文法の本流は、Chomskyが、皆さん、もうよくご存知の81年の*Lectures on Government and Binding*、あのあたりから非常にはっきりと別の仕方での問題を解こうとしたわけで、それはもう一回因数分解 (factorization) をやるということでした。つまり、Chomskyはそれ以前にも、研究対象を言語運用と言語能力に分解し、後者をさらに幾つかの部門 (component) に分解するなど、重要な因数分解を繰り返していたわけですが、ここ

でもう一度、因数分解をやる。言語を中核 (core) と周辺 (periphery) に分ける。それまでは言語というのは一つの対象領域、単一の理論の記述対象となりうるようなものであるというふうに、これはもう大前提として皆そういうふうに考えていたわけですが、それを直す。中核の部分と周辺の部分に分ける。どう分けるかというのは、やってみないとわからないのだけれども、とにかく二つの異質なものに分かれていて、普遍的な強い理論はその中核のところ、それとは別種の理論が周辺の部分にあって、それを合わせると、言語の全体が捉えられるのではないかっていう。当面は、だから、理論の中心的な対象を中核のところに絞る、ということは周辺部は省くわけですが、その時点でみると、伝統文法的なアプローチの人たちが知っている、それぞれの言語の細かな事実群というのは、大部分が周辺部の方に入っていく、つまり、例えば、他動詞と目的語が一緒になって動詞句を作るって、そういうような基本的なことは中核の理論で扱えるようにしてあってもですね、後で見ると大部分の、皆さんが例えば大学を受ける時に英語の文法やなんかを勉強なさった時に出て来たようなこと、あれは大部分が中核の原理では扱えないような種類のことで、それは英語に限らずあらゆる言語に出て来るわけです。ですから、初期の問題の解き方として中核と周辺の因数分解をやるっていう、それは一つの大事な考え方なんですけれども、現状ではその道というのは、言語の実質の大部分を守備範囲の外に出すことによってしか成り立たない、そういう状況だっているように思います。もちろん今後ずっといつまで経ってもできないということは、誰にも言えないわけですが、あれから 30 年近く経っても状況は良くなっているようには見えないわけです。

それで、もう一つの考え方というのは、ふつうに受け止められている言語というものを、中核も周辺も含めてなるべく全体を統一的な扱いをすることはできないかと。Chomsky の初期の理論でなぜそれができなかったか、ということを考えてみると、それは、皆が認めている大前提のなかに何か間違えているところがあったからではないかと、そこを直せば「周辺」をそれほど切り捨てなくても済むのではないかとというふうに話が進んでいったわけです。

こういうことを考えていく時には、いくつか大前提がありまして、それについてまず触れておかなければいけないかと思えます。というのは、理論言語学に最近入ってこられた方は、最初の教科書というのは、たぶん 81 年以降の枠組みで書かれた生成文法の理論であったり、あるいは認知文法の枠組みで書かれた教科書であったりするんだらうと思いますが、そのために、初期の Chomsky が成し遂げた、非常に重要なことが、かすみかかっていると思われま。Chomsky が伝統文法や構造主義の言語学の後、成し遂げてくれたこと、それは非常に明確な形で科学の方法を言語研究の中に持ち込んでくれたということです。その意義は現在も変わらないわけで、科学の方法で言語を見ていくっていう、これはもう全面的に継承していきたい考え方です。ところが最近の教科書なんかでは Chomsky の大功績のその面を強調しないで、具体的な理論とか、まあはっきり言えば、枝葉に属するようなどころから教え始めるために、その枝葉のところ、怪しいところが出て来ると、Chomsky の考え方の全体を放棄してしまうってような、そういう傾向が出て来かねないわけですが、科学の方法を導入してくれたっていうところは、これはずっと変わらず、非常に大事なことで、継承していかなければいけない。動的な文法理論の場合も、その基盤の部分は全面的に Chomsky に依存している。Chomsky に肩車をしてもらっているわけです。で、その科学の方法というのはどういうことか、これはごく簡単にでも言っておかないと、あとの話が宙に浮きますので最初に少し触れておきます。

それでハンドアウト³なんですけれども、二種類ありまして、一つは最初の 6 ページで、A Dynamic Approach to “F to [F] to Lex” と書いてあるものです。それから Appendix, 付録が別に 24 ページあります。ちょっとわかりにくいですが、「ハンドアウト本体」と「付録」と言って区別することにします。今日はハンドアウトに書いてあることを全部やるつもりはもちろんなくて、ところどころ黒板に書く代わりに付録を使ったりしてやっていきたいと思います。

全体の話の筋は、まずそのハンドアウト本体の方で概略、今日どういうことをやりたいと思っているかを見ていきますと、1 ページ目の A のところで、Background Assumptions, これは一部分もう先ほど話したんですけど、それをまず見ます。そのあと、B のところで、動的な理論、つまり Chomsky のどこのところからどういうふうに分かれて行くのかっていう、その大筋をお話したいと思います。その間、具体例を少しずつ見ていきますけれども、2 ページ目の C と D のところでは、事例研究の具体例に簡単に触れて、そのうちのいくつかについては、時間のある範囲内で少し詳しく見ていくというふうにしていきたいと思います。

- A. Background Assumptions (Kajita 1977-81)
 - General methodological assumptions
 - Field-specific assumptions
- B. Some Foundational Postulates for Dynamic Theories of Language
 - Two basic approaches to “possible grammars” (Appendix, p. 1)
 - Four major points of divergence from Chomsky (Kajita 1986, 2002:App 15)
 - Models of language acquisition
 - Types of constraints
 - Types of evidence for the dynamic view of language (App 15)
- C. Case Studies I: English Constructions
 - 1. *far from* (Kajita 1977, 2001:App 3, 2002:App 18)
 - 2. Degree phrase preposing (Yagi 1984)
 - 3. Indirect-question ‘complementizer’ *if* (Omuro 1985)
 - 4. *as if* (Hatori 1985)
 - 5. Quasi-coordinator *as well as* (Fuji 1986)
 - 6. Infinitival relative with *wh*-pronoun (Ishii 1985)
- D. Case Studies II: Data from Linguistic Typology
 - 1. Demonstrative (Anderson and Keenan 1985, Diessel 1999, Dixon 2003; Lock 2001)
 - 2. Syntactic categories (Kajita 2000:App 13-14, Stassen 1997)
 - 3. Case (Plank ed. 1995, Nordlinger 2000; Nichols 1992, Cysouw 2002)
 - 4. Reflexives and bound variables (Lee 2002a, b)
 - 5. Negation (Kajita 2001:App 1-12)
 - 6. Expletives (Thráissón 2003, Holmberg and Nikanne 2002, Perlmutter and Moore 2002; Holmberg 2000; Roberts 2001)

最初の A のところに戻りまして、科学の方法の一番大事なところは、実在論的な立場 (realist position) で科学の理論を解釈するということです。言い換えると、科学の理論というのは、現実の世界の一面を表示しようとしたものである。これは当たり前のことのように聞

³ ハンドアウトは稿末に掲載。

こえますけれども、先ほど言ったような、Chomsky の方法論的な影響が薄らいでくるにつれて、この实在論的立場から外れたような記述を、たぶんそれと気が付かないでやっている場合が非常に増えているようです。しかし本来は、あくまでも現実世界に実在するものの一面の記述、表示なのだ、ということです。

A. Background Assumptions (Kajita 1977-81)

General methodological assumptions

realist position

(greater) falsifiability

generality, simplicity; systematicity, exhaustiveness

(severity of) test

Field-specific assumptions

domain: language (internal state that associates form and meaning)

levels of explanation

language use (linguistic performance)

sentence (structural description)

grammar (linguistic competence, static internal state)

ontogeny (language acquisition involving among other things

constraints on possible grammars, usually called ‘Universal Grammar’)

evolution

そのちょっと下に Field-specific assumptions と書いてありますが、これは言語を研究対象にした場合の前提ですけれども、科学の一般方法論を言語に当てはめた場合、先ほどの实在論的立場というのは具体的にはどうなるかと言うと、Field-specific のところに domain として書いてあるところにありますように、言語というのは人間の内部状態の一面であると考えて、それを研究の中心に据えることになります。それにさらに付け加えるならば、言語は表現形式と意味を結び付ける働きをする、そういう人間の内部状態の一面である、これを研究対象にする、というふうに考えることによって、言語理論というのが实在論的な解釈を与えられることになるわけです。これは言われてみれば当然のことなんですけれども、構造主義言語学の場合はそういうふうには考えていなかったわけで、言語の発話データが研究対象であると。発話は観察できるから、その研究は科学的でありうるのだ、という立場を取っていたわけですけれども、それでは見当違いであるわけです。

で、内部状態ということになると、直接観察できないわけで、それについての理論の善し悪しはどういうふうに判定するか、言い換えれば研究をどういうふうに進めていけば良いかということがもちろん問題になるわけですけれども、一般方法論の方で言われていること、特に Karl Popper が *The Logic of Scientific Discovery* (1959) で非常にきれいに整理してくれた科学の一般方法論というのは、どういうことかと言うと、より大きな反証可能性 (falsifiability) と厳しい検証 (test) の二本柱から組み立てられています。科学の理論というのは、まず反証可能でなければいけない。現実の世界の一面を述べたものはずなんだから、現実世界と比較して合っているか違うかということと言えるようなものでなければそもそも意味がない。では、二つ以上、反証可能な理論が同じ領域について言われた場合、どちらを選ぶかと言うと、反証可能性がより大きい方が選ばれる。これはちょっと常識と一見反するようなんですけど、ここが Popper の考え方が一番大事なところで、科学の理論というのは、反証はできる

けれども立証することは論理的に不可能なわけですね、ご存知のように。で、どうするかと言うと、Popper は、まあ言わば居直ったわけで、できない立証可能性をあてにするよりも、できる、論理的に可能な反証可能性というのを最大限に利用した方が良い。事実、科学の進歩というのはその線で進んできているわけです。もし間違っていたら、簡単に反証されてしまうような強い理論を立てて、そしてそのテストを厳しくやっていく。テストしてもテストしても反証されない、間違っていたらすぐに反証されるはずなのになかなかしぶといというのがあると、それは望みがある。もともと反証しにくいものよりは、こっちの方が現実の世界に近いことになるという、そういう考え方なわけです。この、より大きな反証可能性というのが根本にあって、そこからいろいろな、科学の条件が派生的に出て来るわけで、早い話が、科学の理論というのは、無矛盾でなければいけないとか、あるいは精密でなければいけないとか、一般性が高い方が良いとか、簡潔な方が良いとか、体系的なものの方が良いとか、網羅的なものの方が良いとかっていう、そういういろいろな科学の理論に付けられる条件が言われていて、我々はそれに合った理論を作ろうとしているわけですがけれども、こういう諸条件というのはみんな派生的なものであって、根本は、より大きな反証可能性というところから来るわけです。どうやって出て来るかということ、先ほど紹介に出て来た、『変形文法理論の軌跡』という本と「生成文法の思考法 (1)-(48)」の中で、かなり詳しく説明してあります。で、この二つのポイントですね、実在論的立場に立つということと方法論として反証可能性と厳しいテストということですね、Chomsky はそういう言葉では述べていないんですけども、実際にやっていることを見ると、まさにそういうことをやっているわけです。

General methodological assumptions

realist position

(greater) falsifiability

generality, simplicity; systematicity, exhaustiveness

(severity of) test

で、この、より大きな反証可能性と厳しいテストは両方とも不可欠です。テストというのは、言語学では例えば伝統文法的な実際の事実ですね、経験的な事実をきっちり見て、それに合うような理論を作っていかなければいけないということですから、伝統文法に基盤を持つ人たちは、このテストの方をものすごく気にするわけですね。そちらの基盤が弱くなってくると理論が面白ければ良いみたいなふうになって、知的ゲーム、あるいはサイエンス・フィクションに近いような、面白いけれども、現実の事実を捉えてはいないというふうになりがちなわけです。一方、伝統文法的な方だけですと、つまり、より大きな反証可能性を求めようとしなければ、またこれはこれで、その場その場で気が付いたことを、自分流の言葉で述べていくだけで、体系性も何もない、まあ、「良い子の夏休み観察絵日記」みたいな、そういうものになってしまうわけで、最近そういうのがまた段々増えてきている、つまり、pre-Chomskyan な伝統文法のできそこないみたいなのが増えてきているんで、このあたりはChomsky をしっかり踏まえなければいけない、というふうに思います。

このような一般的な方法を言語に当てはめていくと、さきほど言ったように、内部状態ということが出て来たわけですがけれども、それを説明する理論を立てる時に、言語というのを全部同じ一つのレベルで見ていくのではなくて、説明のレベルをいくつか分けて見ていく方が良い。

Field-specific assumptions

domain: language (internal state that associates form and meaning)

levels of explanation

language use (linguistic performance)

sentence (structural description)

grammar (linguistic competence, static internal state)

ontogeny (language acquisition involving among other things

constraints on possible grammars, usually called 'Universal Grammar')

evolution

最初のレベル, language use と書いてありますけれども, Chomsky で言えば言語運用にあたるわけで, 一回一回の出来事, 言語を用いて行う活動, 読み書き, 聞き話すというようなことから, 文の容認可能性 (acceptability) を判断するとか, 意味的に多義であるかどうかを判断するとか, そういうのも含めた language use です。あるいは, 言語心理学者がよくやるような実験の被験者になって反応するのも, この language use, 広い意味での言語を用いた行動, 活動で, これが一番具象的な現実にかかる出来事のレベルであります, これは観察できることが多いから資料になる。資料としてはこのレベルが唯一の資料になる。一つ飛ばして文法 (grammar), これは, 広い意味での文法で, 言語能力, 内部状態, 先ほど言ったような内部状態。形式と意味を結び付ける働きをするものの一部分。この文法が生成する文, あるいはその構造というのが, さっき飛ばしたところにあるわけですが, これがまあ, 言語運用と言語能力の接点を成していると見るわけです。つまり文法は構造を持った文を生成して, その文が使われる。文法自身は, 頭の中に内部状態として収められているんだけど, 文はそのままの形で入っているわけではなくて, 文法によって生成される。ちょうど足し算の仕方は頭の中に入っているけれども, $345+296$ が 641 であるというようなことが一々入っているわけではないのと同じように, 文法が入っていて, それが実在である。Chomsky の立場で言うと, 内部状態なんだから, これが実在。文の集合というのは, そこから派生的に出て来るものだし, それから言語運用というのは実在である文法を含む様々な要因が働き合って行われるものである。言語学者としては研究の中心をひとまずこの文法の部分に置くわけだけでも, 実在であるからには, 何らかの仕方で発生したはずで, どのように発生してきたかという, 発生に関する理論がなければいけない。発生の理論と整合するような文法を考えていかなければいけない。ですから, 個体発生 (ontogeny) ですね, 言語習得を一切考えないで, 言語というものを, 大人の言語というものを考えていくというのは, これは意味を成さない。なぜ意味を成さないかという, それは先ほどの, より大きな反証可能性を十分追求しないからです。大人の文法, 例えば英語の文法なら文法として案が二つあった時, 観察された大人の言語に関する事実そのものとはどっちも矛盾しないとして, どっちを選ぶかという時に, 片方は一般的な言語習得の理論によって出て来るものだけでも, もう一方はそうではないとすると, 言語習得理論に合った方が正しいということになる。これは, 言語を実在と見ることによって反証可能性が高まってくるわけですから, それを使わなければいけないわけで, 最近のいくつかの学派の中には, 言語習得の問題は無関係である, そんなことは関係ないんだと, はっきり言う人たちが増えてきていますが, それは Chomsky 以前に逆戻りしているのであって, より大きな反証可能性を求めるといふ科学の方法に立つ限り, そんなことは言っていられないはず。そこで, 個体発生, 言語習得は様々な仕組みが働き

合って行われると思いますけれども、その中で、一つの、言語学者にとって中心的な要因は、可能な文法、人間の自然に習得できる文法というのはどういうものかという、その定義と言いますか、制約と言いますかね、characterization, それが重要。子供が乏しい資料から、正しい文法に辿り着くのは困難なはずなただけけれども、実際にはそれができている。できているからには、初めからどういう種類の文法を形成するかっていうことが生まれつき決まっていると考えざるをえない。こここのところも Chomsky の非常に重要な考え方で、皆さんよくご存知のところでは、その可能な文法とは何か、自然に習得できる文法とはどういう種類のものか、その究明が中心的な課題になってきます。

可能な文法の集合へのアプローチ、基本的には二つの道が考えられます。一つは Chomsky, それから他の大部分の人たちが採っているやり方で、「出力説」(output-oriented approach) ともいべきアプローチで、それに対する考え方、もう一つ別の可能性、それは「過程説」(process-oriented approach) です。付録の 1 ページ目の下半分をちょっとご覧ください。

TWO BASIC APPROACHES

(I) Output-oriented Approach

attempts to characterize “possible adult grammars” exclusively in terms of the properties of adult grammars themselves

G_n must/may have property P. -- Format (I)

virtually all the linguistic theories proposed so far

(II) Process-oriented Approach

attempts to characterize “possible next grammars” in terms of the properties of the present grammar of the language

If G_i^L has property P, then G_{i+1}^L may have property P', where $i \neq 0$. -- Format (II)

P may be a property that does not appear in G_n^L or, for that matter, in any G_n .

“Possible adult grammars”: results of the developmental processes guided by the constraints of Format (II); possibly not finitely characterizable in terms of Format (I).

(Kajita 1977, 1977-1981, 1982-1984, 1986, 1992, 1997.)

Two Basic Approaches というところに少し書いてありますが、その (I) の考え方というのは、可能な大人の文法を定義するのに何に注目すれば良いかという、もっぱら大人の文法自体の性質だけを見ればよい、それだけを使って、「可能な文法」の正しい定義ができるという考え方なわけです。入門コースでこんなふうに言われたことはないと思いますけれども、実際やっていることはそうなんです。例えば、Chomsky の第一期の理論ですべての文法は句構造規則と変形規則と何々とかから成り立っている、というようなことを言う場合、その句構造規則とか変形規則というのは大人の文法の中に入っている情報なわけです。つまり、大人の文法は、どの言語の文法であっても、ある性質、P なら P という性質を持っていないか、持っていることが可能であるとかっていう、そういうタイプの条件の体系によって「可能な文法」が定められている。大人の文法自体の特徴だけを見て可能な文法と不可能な文法が区別できる、それ以外の特徴は見る必要がない、というのが、出力説です。これは、Chomsky に限らず、Bresnan にせよ Gazdar にせよ Perlmutter にせよ、みんなこの立場を暗

黙のうちに採用しているわけです。Chomsky の第二期の原理と変数の理論になっても同じです。X バー理論とか、格理論とか θ 理論とか、みんな大人の文法自体の中に含まれている情報です。これに対して「過程説」というのは、大人の文法の特徴だけでなく、言語習得の過程も見なければ「可能な文法」を正しく規定できない、という考え方です。つまり、大人の文法がそこに至る途中の段階で、その言語の文法がどういうふうになっていたかによって大人の文法がどうなるかという可能性が違って来る。大人の文法の特徴ではなくて、その言語の習得の段階段階で、その段階の現在の文法、その性質によって、次の段階の文法がどうなるかっていうことが決まる。で、その展開の仕方自体は普遍的で、子供はみな同じ展開の仕組みを持っている、そこは同じであるという、そういう考え方です。だから、その展開の仕組みでは出て来ないような言語は習得できない、というふうに制約していくわけですが、別の言い方をすると、L という言語の習得段階 i の文法がもしも P という性質を持っていたら、そうするとその言語の次の段階の文法は、その P と結び付けて定義される別のある属性 P' を持つことが可能である。そういうタイプの、原則 (principles) と言っても良いし制約と言っても良いですけども、それにも注目した方が良いのではないかということです。Chomsky 式のすべての言語のすべての段階の文法に通用するような制約もあって構わないし、実際ごく単純なものは有るわけですけども、だけど、言語の実質、伝統文法家が問題にするような言語の大部分ってというのは、こういう展開方式の法則によって可能にされるものではないか。この種の法則ですと、その P' という属性を持った文法が出て来うるのは、いつでも許されるわけではなくて、その直前の段階の文法が、ある P という性質を持っている場合に限られるわけです。それ以外の時には他の言語で可能な性質であっても、その言語のその段階では可能にならないわけです。ですから、段階ごとに見ていくと、非常に限られた、制約のきつい定義と等価になるはずだと。そういう考え方です。その下に書いてあるのは、ちょっと先の話になるんですけども、ついでに言うておきますと、問題になる属性 P というのは、必ずしもその文法自体に現れる性質である必要はない。それ以外に例えばその文法によって生成される文構造ですね、その文構造の性質であっても構わない。文法自体にはそういうことは書いてないんですけども、その文法規則をいろいろ組み合わせて出て来るある構造、その構造から読み取れる情報であっても構わないわけです。これは後で実例が出て来ます。ですから二つの点で、Chomsky の定義と既に違ったわけで、一つは大人の文法の特徴だけではなくて、それ以前の段階の文法の特徴を見なければいけないというふうに言ったこと。それから、その特徴が文法自体の特徴でなくてもいい場合がある。生成された構造の特徴ということもありうるっていう、そういう点で基本的に違った考え方を採ることになります。こういうふうに見ていくと、そうすると、可能な大人の文法の集合というのは、単に、展開の法則の適用によって出て来うる文法の集合、というふうに規定されるべきものであって、大人の文法の特徴だけを使って、大人の可能な文法とはどういうものかということとを別に言う必要はない。展開の法則で出て来うるものは可能だし、出て来えないものは不可能であるというふうに分かれるので、その分け方は、展開の法則を使って分けているわけで、大人の文法の性質だけを使って分けるのではないわけです。ひょっとしたら、そういう、その、(I) の出力説では、いくらやっても正しい定義はできないかもしれない。もちろん無限個、無限の長さの定義をしていけば何だってできてしまうわけですけども、大人の文法の特徴だけに着目しながら、しかも有限で大脳生理学的に実現可能な定義をすることとは、不可能かもしれない。そして不可能であっても構わない、そういう立場です。

ハンドアウト本体の方に戻って、1 ページ目の下の方に簡単な図が書いてあります。

B. Some Foundational Postulates for Dynamic Theories of Language
(Kajita 1977, 1977-1981, 1982-1984, 1986, 1997, 2001:Appendix, pp. 1-12)

Two basic approaches to “possible grammars” (Appendix, p. 1)

- (I) Output-oriented approach
- (II) Process-oriented approach

Four major points of divergence from Chomsky (Kajita 1986, 2002:App 15)

Models of language acquisition

(A) Instantaneous model

$\text{Data}^L \longrightarrow \text{LAD} \longrightarrow \text{Grammar}^L$

(B) Noninstantaneous model

Data_{i+1}^L and Grammar_i^L both point to LAD_i , which then points to Grammar_{i+1}^L ($0 \leq i \leq n-1$)

Types of constraints	(I+A)	(II+B)
$C(G_i^L, D_{i+1}^L)$	-	+
$C(G_i^L, -)$	-	+
$C(-, D_{i+1}^L)$	-	+
$C(-, -)$	+	+

↑ p.1
↓ p.2

(Cf. potentially relatable typological data:

1. genetic vs areal vs ‘typological’ properties
 2. likely vs unlikely to arise; stable vs unstable
- | | | | |
|----|-----------------|----------|------------------------|
| ++ | high front V | SOV, SVO | adposition |
| +- | nasal V | | definite article |
| -+ | V-harmony | VSO, VOS | |
| -- | velar implosive | OVS, OSV | possessive classifier) |

Types of evidence for the dynamic view of language (App 15)

先ほど言ったのは、可能な文法の定義の仕方についての二つの可能性ですが、その図で書いてあるのは別の問題で、言語習得のモデル、ですね。Chomsky は、言語習得をうんと単純化して、瞬時的な習得のモデルで考えても大事なことはそれで捉えられるという立場です。LAD (言語習得機構 Language Acquisition Device), 子供が持って生まれているその仕組みに、これから習得する言語の資料の総体がわっと一遍に与えられると、そこからその資料に対応する言語の文法が出て来ると、そういう瞬時的な習得モデルで、その LAD の中に組み込まれている一つの要因として、可能な文法の定義が UG (Universal Grammar 普遍文法) として入っていて、それが先ほど言った出力説で書かれたものである、と。そういう構図になっているわけですが、もう一つの可能性は、(B) のところで、非瞬時的なモデル、これは、LAD の入力の種類あって、一つは次の段階の資料で、もう一つはその段階の文法です。瞬時的ではなくて非瞬時的ということは、段階段階で分けて考えていくわけで、i という習得段階で次に進む時に次の可能な文法というのはどうやって決まるかと言うと、一つは、新しい資料、i+1 の段階のその言語の資料と、もう一つは、その段階の現在の文法、その両方が入力になって、その段階の LAD が働いて、次の段階の文法の可能性が決まる。(I), (II) とそれから (A), (B)

というのは独立の問題でして、(A)の瞬時的モデルの LAD の中に (II)の過程説的な制約を組み込むこともできるし、逆もできるわけです。

Two basic approaches to “possible grammars” (Appendix, p. 1)

- (I) Output-oriented approach
- (II) Process-oriented approach

Models of language acquisition

(A) Instantaneous model

$\text{Data}^L \longrightarrow \text{LAD} \longrightarrow \text{Grammar}^L$

(B) Noninstantaneous model

$\begin{array}{l} \text{Data}_{i+1}^L \\ \text{Grammar}_i^L \end{array} \longrightarrow \text{LAD}_i \longrightarrow \text{Grammar}_{i+1}^L \quad (0 \leq i \leq n-1)$

言語習得機構というのは UG だけから成り立っているのではなくて、その他いろんなもの、資料の分析の仕方とか、比較の仕方とか、パラメーター (parameter) のセットの仕方とか、いろいろな情報が入っているわけで、そここのところをいじれば、可能な文法の定義自身は (I), (II) どちらをはめ込んでも可能なわけです。が、一番自然な結び付きとしては、(I)は (A)と、(II)は (B)と結び付いている、普通そういうふうを考えられているわけです。(B)のところに書いてある i というのは、最初は i は 0 で、つまりまだ言語資料に何も接していない段階で、 grammar_0 というのは、その言語独特の内容は何もないわけで、最初の資料が与えられると、最初の文法ができて、次の段階ではさっきできた文法が入力になって、同じ手順が繰り返されていくという、そういう構図です。

こういうふうを考えないと説明しにくいことがいろいろあるわけで、その一つが先ほど言った 70 年代以来こだわっているということなんですけれども、それはたくさんある。伝統文法に書いてあることほとんど全部そうなわけですから、数えきれないくらいあるんですけれども、一つだけ例を見ておきますと、(何回もこの話を聞いている方がいらっしゃって申し訳ないんですけど、初めての方もいらっしゃるし、わかりやすい例ですから簡単にちょっと) 付録の 3 ページ目をご覧ください。

1. Far from and Other Quasi-Idiomatic Expression

- (1) The city is [AP [A far] [PP from the airport]]
- (2) a. Those men are [AP [A far] [PP from [A innocent]]]
- b. Those men are [AP [Adv far from] innocent]
- c. Those men are [AP [Adv hardly] innocent]

その Far from ... というところなんですけど、例文 (1) を見ますと、*far from the airport* という、普通の構文では *far* が形容詞で *from the airport* というのがその補部になっていて、*far* が形容詞句の主要部である。ここまでは句構造規則の理論でも、それから X バー理論でも取り込むことができるわけですね。皆さん入門でなさったような方法でこんなのはできるわけです。ですけど、(2a) *Those men are far from innocent* というのになると、まず *from* の次に形容詞が出て来ているのが気に入らないわけなんですけど、今はそこは置いておくとして、*far from* のところに注目すると、さきほどの (1) と同じような構造だとすると、その (2a) のようになっているはずなんですけど、でも意味から考えると、この文は「その人たちは *innocent* というのから遠い状態にある」というふうにとってもいいのだけれど、もう一つの取り方は、「*innocent* ど

ころではない」, つまり (2c) *Those men are hardly innocent* みたいな, そういう意味で, (2a) の *far* と *innocent* とどっちが主要部かといったら, *innocent* の方が主要部であるという, そういう解釈もできるわけです。 *far from innocent* が全体として形容詞句だということは同じで, 変わっていないんですけれども, その内部の構造が, さっきは *far* がはっきり主要部だったのに, 意味から言うと, 今度はどちらにも取れるっていう, そういう状況になってるわけです。意味から言うとそうなんだけども, 統語構造上も, その *innocent* が主要部になっている方の構造が本当にあるかどうか。あるとしたら (2b) みたいになってる。(2b), *far* と *from* が結合して *adverb* を構成しているっていう, そういう構造になっているということなんですけれども, これは事実そうになっているのではないかと思われる節がいろいろとあるわけです。その一つは (3) のところに書いてありますけど, 普通の場合, 形容詞句を名詞の前に置く時には, 主要部の形容詞が最後に, つまり名詞のすぐ前に来なければいけないわけで, だから, *the tall boy* とか *the very tall boy* とかは, *tall* という形容詞が名詞のすぐ前で形容詞句の最後に来てますから, 良いんですけど, *the [proud of his son] father* とかっていうのはダメですね。それは形容詞が最後に来てないからで。

- (3) a. *the [AP far from the airport] city
 b. those [AP far from innocent] people
 b' There are many [far from superficial] respects in which the intellectual climate of today resembles that of seventeenth-century Western Europe.

- (4) It [VP far from exhausts the relevant considerations]

それに照らして考えてみると, この (3b) は非常に注目すべき例なわけで, *those far from innocent people* というのは良いわけですよ。これが許されるためには (2b) の構造になっていないといけない。

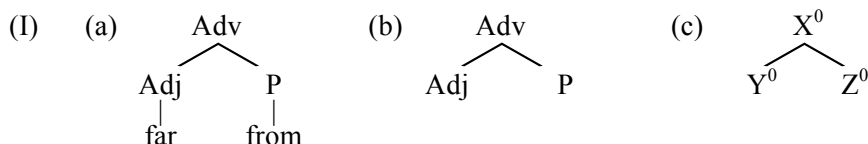
- (2) a. Those men are [AP [A far] [PP from [A innocent]]]
 b. Those men are [AP [Adv far from] innocent]
 c. Those men are [AP [Adv hardly] innocent]

(2b) の構造というのは *innocent* が主要部で, 形容詞句の最後に来てますから, *far from* は *a very tall boy* の *very* と同じようになっているわけです。(2a) のような *far* が主要部のままの構造だけしかないんだとしたら, (3b) は出て来ようがないのに, 実際は良いわけだから, これが一つの証拠です。で, 同じような証拠が (3b') のところに書いてある, *there are many far from superficial respects in which ...* です。これとは少し違った種類の証拠は例えば (4) *It far from exhausts the relevant considerations* で, 「関係あることを尽くしているなんて到底言えない」っていう, そういう意味の文です。この場合, *it* が主語で, それ以下が動詞句であることは疑いがないわけで, で, *far* が依然として主要部だったとしたら, 形容詞が動詞句の主要部になってしまうわけですね。しかも *from* の後ろに定形動詞が出て来るなんていう, そんなめっちゃくちゃな構造になってしまうわけですから, この場合はもうどう考えたって *far from* というのがまとまって一つの副詞になっているとしか考えようがないわけです。で, その他にも様々な証拠があります。結論として, (2b) のような構造が英語の文法によって生成される, と。(2b) のような構造を許す情報が英語の文法の中に, *native speaker* の内部状態の中に存在しているということです。そして, これは *far from* 一つだけではないわけで, (5) に書いてあるような例はみんな, A + P という内部構造を持ち, 同じ変則的な役割を果たしているわけです。(6)

はその構造の中に比較級の *-er* まで入り込んでいるというわけですから、これは単純なイデオムではなくて、かなり一般的なものが働いていると考えられるわけです。

- (5) a. It has been going on for close on four years now.
 b. These sentences may have close to the same meaning.
 c. There are next to no statistical data available.
 d. This can be done by other than electrical means.
- (6) a. He always says ‘this won’t take more than another minutes’, and then of course it takes nearer to three-quarters of an hour.
 b. He greeted me with greater than normal politeness.

以上のようなことを考えると、構造としてはその下に書いてある、(I)の(a)みたいな、つまり *far from* という形容詞と前置詞が一緒になって副詞を構成するっていう、そういう構造が出て来たわけで、Chomsky の第一期の理論でこれをやろうとすると、英語の句構造規則の中に、Adverb → Adjective + P という規則がなければいけないということになります。



これは X バー理論に合わないですよね。Adv の主要部がないわけですから。ですから、この構造は Chomsky 式の一般理論の中に閉じ込めようとする、そのままでは入らない。で、これを入れようとする、Chomsky の理論をうんと緩やかにして、X バー理論も成り立たなくらい緩やかにしなければいけないことになってしまいます。X バー理論の実質が崩れると、もちろん、第三期のミニマリスト・プログラムの理論も成り立たなくなります。あれは、X バー理論の予測するところは概ね成り立っているとした上で、では、どうやって X バー理論そのものを言わないで済ませられるかということをやっているわけですから、実質が変わるわけではない。X バー理論が予測するところはそのままとして話ですから、X バー理論が実質的に合わないんだったら、第三期のミニマリスト・プログラムでもすぐ問題になるわけですね。

今のは出力説で考えてみた、つまり、大人の文法自体の性質だけを使って理論を作って、X バー理論とか句構造規則の理論とかいうのを作って、それをなるべく狭くしていこうというふうにすると問題になったわけですが、過程説の考え方では、例えばどういうふうになるかという、先ほどからの説明でもう既に暗黙のうちにそういう目で見えてたわけなんですけれども、要するに、例文 (1) のようなのが基本にあって、同時に (2c) の *hardly innocent* のようなのもあって、英語の習得のある段階でその二つはもう既に習得していると。

- (1) The city is [AP [A far] [PP from the airport]]
 (2) a. Those men are [AP [A far] [PP from [A innocent]]]
 b. Those men are [AP [Adv far from] innocent]
 c. Those men are [AP [Adv hardly] innocent]

その段階で、その (1) のタイプの文の一つのサブケースである (2a) が、意味からいうと両様に解釈できる。その二番目の解釈というのは、(2c) と同じような解釈である。そうすると、その二番目の解釈というのは、構造も *hardly* のモデルに合わせて (2b) のように構造の組み替

えが行われる，組み替えを行うというような展開の法則が働いて出て来る。だから (2b) のような構造は，初めからあらゆる言語で可能なものとして理論が許すのではなくて，今言ったような条件が整って初めて可能になる。(1) とか (2c) が現在の段階の文法に有ったら，今言ったような展開の法則で次の段階で(2b) のような構造が可能になる。これは可能になるということであって，必ずとは限らないわけです。そこまで行かない人だっているわけです。基本のところまで止まっている人だっているわけだし，それからこの (2b) をもっともっとさらに展開して一般化していく人もいるわけです。で，今非公式に言ったのをもうちょっとだけ正式な言い方をすると，そのページの一番下のところに書いてある [B-1] というところで，これが先ほど言った展開の法則の一つの例になります。

(II)

[B-1] Head-nonhead conflict (Y) in $G_i^k \Rightarrow$ Syntactic reanalysis (Z) in G_{i+1}^k

Base: $[x^m \quad \dots \underline{X} \dots \quad Y \quad]$ -- (a) (Head: underlined)
 Derivative: $[y^m \quad [z \dots X \dots] \underline{Y} \quad]$ -- (b)
 Model: $[y^m \quad \quad Z \quad \underline{Y} \quad]$ -- (c)

If a limited subclass of expressions of the form (a) are ‘virtually equivalent’ to the corresponding expressions of the form (c) at some stage of the acquisition of a language, then the rules that generate structures of the form (b) are possible at the next stage of the acquisition of that language. (See Kajita 1977:49-59 for a fuller discussion.)

i の段階で P があつたら次の段階で P' が可能になるっていう，あの原理の一般形の一つの例になります。主要部・非主要部の不一致 (head-nonhead conflict) があつたら，次の段階で，組み換えの操作を加えて，食い違いをなくする，ということですね。図式で書くと，基体としてそこに -- (a) と書いてあるようなのがあつて，これは句全体としては X というタイプで，その主要部は X，先ほどの *far* みたいなものですが，そういう構造を生成する規則が既にあつて，それから -- (c) のような構造が別に既にあつて，この場合は，後の Y の方が主要部であると。そうすると，意味的に (a) と (c) が対応している場合には ... X ... のところを Z と同じ範疇にして，そして統語的にその Y の方を主要部にする。アンダーラインで示してありますけれども。そういう派生的な構造が次の段階で可能になる。そういうふうに見ていくと，条件が整っていない言語では変な副詞は出て来ないが，条件が整ったところでは可能になるという，そういう実際の事実の出入りに，より細かく，きめ細かく合致したような理論を立てていくことができるのではないか。もちろん，こういう，半ばイデオロミ的な表現だけではなくて，もっと様々なものにも適用されるわけで，本体の方に戻りますと，2 ページの C のところに，Case Studies とあつて，今見たのは C1 の *far from* みたいな例の場合です。

C. Case Studies I: English Constructions

1. *far from* (Kajita 1977, 2001:App 3, 2002:App 18)
2. Degree phrase preposing (Yagi 1984)
3. Indirect-question ‘complementizer’ *if* (Omuro 1985)
4. *as if* (Hatori 1985)
5. Quasi-coordinator *as well as* (Fuji 1986)
6. Infinitival relative with *wh*-pronoun (Ishii 1985)

C2 以下の例について言う前に，もうちょっと *far from* について，その後の展開について述べておきますと，付録の 18 ページからのところなんですけど，18 ページのところ，*far from*

関係で基本資料は一部分、今見たようなことで、McCawleyにもこれについて記述がありますが、その後の事実関係、新しい事実の発見とか、それから英語以外の言語で似たようなことがあるということを Riemsdijk (2001) が言ってくれてまして、彼の分析ではどうなるかということ、そこに書いてありますが、接ぎ木 (grafting) という分析を彼は採るわけですけど、今日はそれには立ち入りません。ご覧になれば、理論を弱めるだけだということがすぐわかると思いますから。

1.2 The 'far from' and related constructions.

Basic Data: Kajita (1977, 1982), McCawley (1988, 1998²)

Additional Data:

- | | | | | |
|--------|---|---------|---|-------|
| (1) a. | I didn't touch anything in the room. | F1 | – | M1 |
| b. | He doesn't understand anything like math. | F1 | – | M1/M2 |
| c. | | F1/F2 | – | M1/M2 |
| d. | I haven't had anything like four pints. | (F1)/F2 | – | M2 |
| e. | I have not anything like tried it. | F2 | – | M2 |

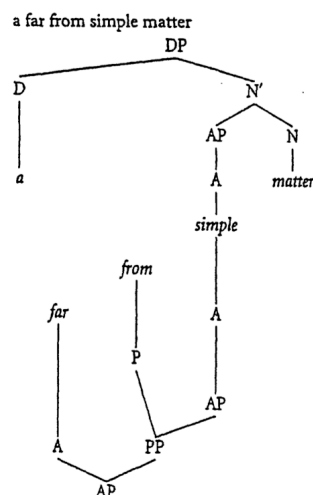
(Cited in Kajita 1987 as an example of extension by 'minimal' steps)

- | | |
|--------|---|
| (2) a. | Zij las alles behalve de bijbel. |
| b. | Zij was alles behalve een goede partner. |
| c. | Zij reageerde alles behalve enthousiast. (Riemsdijk 2001:27) |
| (3) a. | It has been going on for close on your years now. |
| b. | It takes nearer to three-quarters of an hour. (Kajita 1977:51) |
| c. | She is not anywhere near beautiful. |
| d. | This did not cause anywhere near the difficulty experienced by the retarded children. (Kajita 1977:51) |
| e. | ... if they were to buy and ship in the region of three hundred tons of wolfram per month for the rest of the year.
(R. Wilson, A Small Death in Lisbon, Harper Collins, p. 122) |
| (4) a. | *een ver/verre van de stad vliegveld |
| b. | twee ver(re) van onschuldig-*(e) mensen (Riemsdijk 2001:26) |

Analyses:

(I) Riemsdijk 2001

Grafting: joins two subtrees at the (pre-)terminal level (pp. 27, 38)



(II) Kajita 1977

Head-conflict & reanalysis

[_{AP} far [_{PP} from innocent]]

[_{AP} [_{Adv} far from] innocent]]

[_{AP} [_{Adv} hardly] innocent]]

出力説に従って大人の文法の特徴だけを見てやっ払いこうとしているわけですから、その限界を破れないわけです。あと類似のことで、付録の 19 ページを見ますと、Wilder (1999) が別の例についてですけれども、やはり、同じような現象について出力説的な分析を加えています。

1.3 Downgraded Free Relatives

Initial Data: Kajita (1977, 1982, 1985), McCawley (1988, 1998²)

- i) Callus-to-FR ‘percolation’ of
 - a) Selected properties
 - b) Number
 - c) Definiteness
 - d) Syntactic category
 - ii) Position of the callus
 - (1) a. The animal appeared to me to be a unicorn.
 b. The animal appeared to be a unicorn to mé.
 c. There was [what appeared to me to be a unicorn] in the backyard.
 d. ??There was [what appeared to be a unicorn to mé] in the backyard.
 (G. Carden’s and S. Bell’s reponses, Kajita 1985:40)
 - iii) Internal (and external) generalization
 - (2) He came out next day, but I didn’t get a chance of speaking to him [what you might call privately].
 - (3) Frank is awfully sensitive and it had upset him a lot to feel that my mother disapproved of him, and was [what he called poisoning my mind].
 - iv) Pronominal anaphora
 - (4) A combination of what appeared to be two adjectives actually turned out to be exactly that, and not a combination of an adverb and an adjective.
 Cf. A combination of two adverbs which appeared to be two adjectives turned out to be exactly that.
- New Data: Wilder (1999), Riemsdijk (2000, 2001)
- v) Extraction
 - (5) a. something that John is [what you might call [angry about t]]
 b. *something that Mary invited [whoever is angry about t]
 (Wilder 1999:690)
 - vi) Case
 - (6) a. Ich habe mir was man als einen schnellen Wagen bezeichnen könnte gekauft.
 b. *Ich habe mir was von vielen als ein schneller Wagen/einen schnellen Wagen bezeichnet werden würde gekauft. (Riemsdijk 2001:31)
 - vii) Bound anaphora
 - (7) a. They live in what is often referred to as each other’s backyard.
 b. *They live in the place that you used to refer to as each other’s backyard. (Riemsdijk 2001:30)

viii) Idiom interpretation

- (8) a. Nick lost what seems to be called his marbles.
 b. #Nick lost the round objects that are called his marbles. (non-idiomatic interpretation at best) (Riemsdijk 2001:30)

ix) Further internal generalization

- (9) They remain what is called of two minds about this issue. (Riemsdijk 2001:34)

x) External generalization

- (10) a. The girls came to each of us with a cup and saucer, cream, sugar and a brandy sniffer. The men came after them, Richard with a silver coffeepot, pouring coffee, and Howard with the what looked to be pint bottles—at least, large miniature bottles—of Courvoisier. (Examples from Blakely ST James, Christina’s Passion, 1976, Playboy Paperbacks, p. 139, pointed out to me by Takeshi Omuro, July 12, 1983)
 b. a what I’d describe as stupid decision
 *a what I’d describe as a failure decision (Wilder 1999:689)
- (11) a. Bill owns three what some people would consider to be extravagant cars.
 b. In this example, the variable is what most linguists would characterize as improperly bound. (Riemsdijk 2001:34)

ここまで、一番単純な例で、どういう種類のことをどういう方向で考えたいかということの説明したわけなんですけど、他の例として、本体2ページ目のCのところいくつか挙げておきました。それぞれ参考文献がそこに書いてありますから、興味のおありの方はご覧ください。今日は時間の関係で、ごく簡単に、例えばどういう種類のことかということだけ説明しておきます。

C. Case Studies I: English Constructions

1. *far from* (Kajita 1977, 2001:App 3, 2002:App 18)
2. Degree phrase preposing (Yagi 1984)
3. Indirect-question ‘complementizer’ *if* (Omuro 1985)
4. *as if* (Hatori 1985)
5. Quasi-coordinator *as well as* (Fuji 1986)
6. Infinitival relative with *wh*-pronoun (Ishii 1985)

C2は、これは、例えば *too tall a boy* みたいな表現で、普通は、よくご存知のように、*a very tall boy* というふうに、不定冠詞の後ろに形容詞句が来て、その後ろに名詞が来る。形容詞句の中に程度表現 *very* があってもこのままでいいわけですけど、ここに *too tall* と来るのは良くない。*too tall a boy* としなければいけないのだけれど、不定冠詞の前に形容詞が出て来るのは、英語としては変則的です。これは、事実としてはよく知られていることだけれども、どういうふうに説明するか。理論を狭く限定しながら、しかもこのような変則的な表現も可能にするにはどうすればよいか。この形も許すように句構造規則なり変形規則なりを立てようと思えば、ものすごく理論が弱くなるんです。これについて何を言おうがですね、*very* は前に出せないんですから、*very tall* は元のところに置きながら、*too tall* を前に出さなければいけないわけですから、そういう結果がびたっと出て来るような規則を許すように一般理論を立てようとすると、その一般理論というのはいくらも緩やかなものにならざるを得ないわけです。八

木孝夫さんがそれをやったのは、どういうふう考えたかという、前置される場合には、いくつかの条件があって、その中の主要なものが、強勢の型 (stress pattern) ですね。もし *a too tall boy* をそのままにしておくと、*tóo táll bóy* というふうに、一音節で強強勢の語が三つつながるわけです。で、英語では、強弱強弱強弱というふうにリズムが交替していくのが普通で、強音節をつなげるのは嫌う。で、*too tall* を前に出せば、*tóo táll a bóy* で三つの連続は解消されるわけですね。実際これ、前に出されるのは、*as tall* とか *so tall* とか、他の例を見ても、みな程度表現のところが一音節で、*very* とか *extremely* とかは一音節ではない。この一音節であるというのが一つの特徴で、それからもう一つは、これらはみんな補部を取る。*too* の場合ですと、“for ~” で、*too heavy for me* とか。*as* だと“as ~”，*so* だと“that ~” とかいうふうに、文法的に結び付けられた補部があるわけです。で、これらは、もし元のところに留まっていたら、長い表現が名詞の前の形容詞句の位置に来なければいけないことになるわけですが、実際には *that* 節とかは名詞よりも後に来るわけです。そうすると、*so* は形容詞句の中にめり込んでいて、*that* 節は上の方にある。で、これは統語構造と意味構造の平行性を著しく欠いているわけです。そういう時には平行性を回復しようとするような操作が可能になる。で、前に出すと、そうすると、*so* と *that* の構造上の高さがさっきよりは平行的になってくるわけです。その他いくつかの理由が働き合って、こういう形が英語では可能になるのではないかという、そういう見方もできるわけです。その見方は私は非常に自然だと思うんですけども、大事なポイントはですね、この説明で過程説に立つ動的な考え方を使っているということです。つまり、ある段階で、基本的には [NP a AP N] という構造を持った形容詞句、名詞句の構造が出て来て、それから形容詞句の中に程度+形容詞という構造も出て来て、で、その程度表現のなかに *so, as, ...* があって、それから、強勢型が既にできていて、と。そういう条件が整うと、それらの圧力でもって、こういう変則が可能になってくると。だけどそういう条件が整わなければ、こういう特殊な構造はその言語では出て来えないという、そういう説明です。それから、この例で一つ大事なことは、いくつかの要因が働き合うという言い方をしました。つまり強勢型から来る力と、それから構造上の平行性という力と、それからその他にいくつかあるんだけど、それらが重なり合うと、その分だけこの新しい構造の可能性が強くなっていくっていう、そういう考え方です。これは Chomsky 式の言語理論の中には取り入れられていなくて、言語理論というのは一般に可能か不可能かを問題にしてきた。だけど実際にはもっと確率論的な強さの程度みたいなもの、しかもそれが累加的に (cumulatively) 働いていく。そして多分、ある敷居値 (threshold) を超えると、必然になっていく、そういうような働き方を動的な原理たちはすると思われるわけです。*too tall a boy* の例はそういうことを示す例としても大事です。

今のが C2 の例で、それから、C3 の例は、「かどうか」の *if*。これは生成文法の人たちは補文標識 (complementizer) の一つだと言っているわけですが、大室剛志さんが 85 年に *EL*⁴ に書いたものを見ると、最近の研究者たちが言っているような生易しいことではなくて、いろんな特殊な現象が出て来るわけですね。例えば、*I didn't know if...* というのは良いけども、“if ~” というのを話題化して一番前に持ってくると、ぐっと容認可能性が落ちるとかですね。同じ「かどうか」でも *whether* の場合は話題にしたってまったく構わないわけです。というふうに、それはほんの一例ですけども、たくさん、それこそびっくりするくらいたくさん、*if* の特殊

⁴ *English Linguistics: Journal of the English Linguistic Society of Japan*. Tokyo: Kaitakusha Publishing Company, (1984-).

な性質というのが観察されていて、それをさっきのと同じように大人の文法の特徴だけで一般的な制約を立てていこうとすると、とてもじゃないができない。で、一方、動的に、展開法則的に見ていくと、これは、「もしも」の *if* からある条件下で、最初に、ある場合にだけ、この「かどうか」の *if* に切り替わって、その後その用法が徐々に拡張されている。その切り替わり方というのはでたらめではなくて、ちゃんと一定の法則に従っている。これは、最初の洞察は Jespersen もそういう見方をしているところがあるんで、伝統文法家というのはやっぱりちゃんと見ています。それをきっちり理論化していくのが動的アプローチのねらいです。

それから C4 は、羽鳥百合子さんの *as if* についての研究です。*as if* の後ろ、普通は節が来ますが、節以外のものも段々出て来られるようになります。特に短縮の副詞節やなんかで *as if* の後ろの主語と *be* 動詞が省略されて、例えば *He was walking as if sleeping* みたいにできるわけですけど、その *as if* の後ろに来られるものが、段々拡張していきますと、副詞節短縮からは到底出て来ないような場合にまで広がっていきます。例えば、*John, speaking as if to a dog, called out harshly "Stand up"* っていう、この場合、本当は人に話し掛けているんだけど、まるで犬に言うかのように “Stand up” と言った、っていう、そこで *speaking as if to a dog* というふうになっているわけですけど、この *as if to a dog* なんてのは、先ほどの副詞節短縮では決して出て来ないもので、段々広がって、*as if* が副詞になっているんですね。さっき *far from* が副詞になったのと同じように、*as if* が別の種類の副詞、*focalizer* に近いものになって来ているわけです。それが C4 です。詳しくは羽鳥さんの論文をご覧ください。羽鳥さんの研究はその後、『英語教育』でも 86 年でしたかに、要点をわかりやすく書いてくださいますから。

C5 の *as well as* は、等位接続詞の *and* とそれから前置詞との両方の性質を持っているんですね。疑似等位接続詞 (*quasi-coordinator*) です。*rather than* なんかもそうですけれども、これは藤正明さんが詳しくやっています。

それから C6 は、これは例えば *I have a topic on which to work* というような関係節です。定形節ではなくて *to work* という不定詞で、その前に関係代名詞 *which* が来ているわけですけど、これは非常に特殊なんですね。前に来るのは前置詞句でないとダメなんです。*which to work on* というのはダメなんですね。定形節 *a topic which you should work on* だったらもちろん良いわけですけども、不定詞になるとダメ。前置詞をくっつけて前に出すというのはふつうは派生的のように見えるんだけど、この場合はどういうわけか前に出て来なくてははいけないわけです。定形節の時は *which ... on* でも良いけど、不定詞の時はダメで、*on which ...* しか許さないっていう、そういう結果が出て来るように、一般理論を作ってみろって言った時にですね、大人の文法の特徴だけ見て、より基本的な段階でどうなっていたかということは使わないで、そういう結果が出て来るようにやってみろって言ったら、これは非常に難しい。まずできないんです。石居康男さんの論文は、それがいかに難しいかということを書いて、そして代案としてですね、何で前置詞句だったら許されるのかということ、より基本的な段階の文法の性質から説明できるということを書いているわけです。

その他いろいろ、そこに書いてないものもたくさんありまして、例えば、児馬修さんの 84 年の論文というのは、英語史の方から動的な観点で説明した方が良いという例をいろいろ言っているわけです。例えば、補文標識の *for* ですね。不定詞の *for* ですけど、あれ変なものですよ。*for* って前置詞のくせに補文標識の働きをしているわけですよ。そういう範疇の混淆 (*blending*) みたいなのが出て来て、出力説では取り扱いにくいんですけども、児馬さんはそれ

を動的に見ていくと説明できるということを示しています。

その他、日本語の例としては中島尚樹さんという人がいろいろ研究してます。これ、References に挙げてありませんけど、92年にこういう関係の文献表、主な文献をリストにしたものを作っておきましたが、大室剛志さん、大名力さんのところに、その文献表があると思いますから、興味のある方はそれをご覧になれば、中島尚樹さんの日本語についての研究もそこに、90年代の初め頃までの分は入っています。それからまた10年ぐらい経ってますから、また、うんと、倍ぐらいに研究が増えているわけですが。

ここまでは、一つの言語を詳しく見ていった時に出て来る伝統文法的な資料で、それも説明しながら、「可能な文法」の出力的な定義を狭くしようとすると、非常に困るが、動的な見方をすると、かなり望みが出て来るということをお話したわけですけど、では、そういう細かい事実だけが根拠なのか。Chomsky なんかの中核 (core) のところで取り扱えるはずだとしている、より基本的な事実群ですね、それはどうなんだという疑問が出て来ます。可能性は二つあるわけで、一つは中核部の理論と今やったような細かい事実の動的な理論は、別々に両方立てるんだという見方。言い換えると、動的な理論というのは中核部の理論の付録であるという見方と、それからもう一つは、よく調べていくと中核の部分でも今見たのと同じようなことが起こっているのではないかという見方です。そして実は、最近20年ほどの研究で、周辺だけでなく中核の部分でも、出力説的な理論ではうまくいかないという事例がいろいろ出て来ています。そういうことを休憩を挟んでお話していきたいと思います。20分休憩に致します。

- 休 憩 -

〈梶田先生〉

それでは、続けたいと思います。

出力説のもとに可能な文法を狭く定義しようとしても、事実をちゃんと見ていくとなかなかうまくいかない。で、代案として、習得の途中での展開の仕方の中に普遍的なものを探した方が良いのではないかということで、それを非常にはっきり示す例は、先ほどのような伝統文法的な、それぞれの言語の各構文を細かく詳しく調査していった時に出て来るような、そういう事実群がまず最初にあるわけで、それに関しては、もう出力説ではうまくいかないというのは確立したと見て良いと思います。事実、そういう細かい記述になると、多くの人が出力説的な理論に依拠しながら、実際に言っていることは、習得の途中での展開の法則に当たるようなことを使った記述をしているわけです。そのおかげで自然に聞こえるのですが、そして自然に聞こえるから元の理論そのものもそれで良いかのような印象を与えてしまうんですけども、実際はよく見ると、その理論では本当は言えないこと、その理論に立つ限り言えないようなことを言って、記述が自然に見えている、とそういうことが増えています。ですから、そういう、まあ言わば反則をしなければ（つまり、厳密に出力的な理論に則ってやっつけば）、それぞれの言語の大部分、伝統文法で記述されているような実質的な部分はみんな省かざるをえなくなってくる。一方、過程説的なアプローチでは、そのかなりの部分がうまく説明できる、ということももう確立したと思って良いと思います。それであと問題は、より中核寄りのところはどうかということ、そこでもやはり拡張の法則、動的なものが働いているのか、それとも中核の方はもう初めから可能性がUGのようなもので決めら

れていて、途中の段階の文法がどうであれ、結局はその同じ決められたところに落ち着いていくというふうになっているのか、っていうことですね。

それで、70年代と現在とを比べて、一つ、言語学界全体として状況が違っていることがあります。それは、30年前にはまだ出て来ていなかった新しい種類の研究が出て来たということで、一つは言うまでもなく言語習得の過程 (course of development) についての研究が非常に進んできている。Bowerman とか、Slobin とか、その他大勢の人たちが非常に実質的な研究をしてきているわけで、それがかなり使えるようになった。それからもう一つは言語類型論 (linguistic typology) が70年代以降非常に発達してきて、世界中の言語を見渡すことができるようになった。あるトピックについて、例えば、否定なら否定とか、指示詞なら指示詞とかについて、世界の言語でどういうふうな変種があって、どういう分布になっているかっていう、そういうことがかなりわかるようになってきたわけです。この二種類の証拠は、出力説と過程説の優劣を比較する時に非常に役に立つ資料になります。

習得過程そのものの研究が役に立つというのは言うまでもないわけで、出力説的な理論は、その理論だけからは、子供が何をどういう順番で習得していくかということについての予測はないわけで、一足飛びに入力の総体から出力が出て来るっていう、そういうモデルなわけですから、途中で何がどういう順番でという予測はすぐには出て来ないわけです。UG のほかにいろんなものを LAD の中に付け加えないと、UG 自体からは、そういう、発達過程についての情報は出て来ない。それに対して、動的な理論の方は、当然そういう予測をすることになります。前の段階で何々だったら次にこれこれが可能になるっていう、そういうタイプの法則が中心だというんですから、何をどういう順番で子供が習得していくかということについても、予測だらけになるわけです。その点反証可能性がより大きいわけです。

で、もう一つの言語類型論の方はどうかというと、これも非常に実質的な資料を提供してくれます。というのは、類型論の方で調べているのは中核に属するような基本的なことが多いからです。例えば否定はどうやって表すかとか、指示詞っていうのは世界の言語でどういう変種があるかとか、所有関係は世界の言語でどのように表現されるか、とかですね。6000からあると言われている言語からいろいろ工夫してサンプルを採ってですね、偏らないサンプルを、語族的に偏らないし、地域的にも偏らないようなサンプルを採って、非常に多数の言語でもって調べていくということが進んできている。もう最近では、300, 400 っていう数の言語について調査するというのは、当たり前ようになってきています。それで、この方面の研究が進むにつれて、中核と考えられている部分ですらも出力説ではどうにもならないということが、どんどんはっきりしてきています。

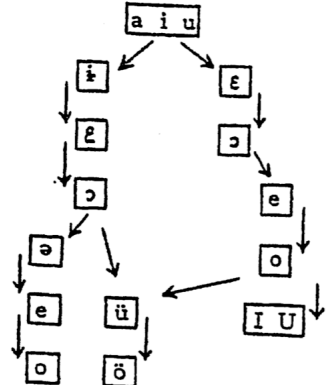
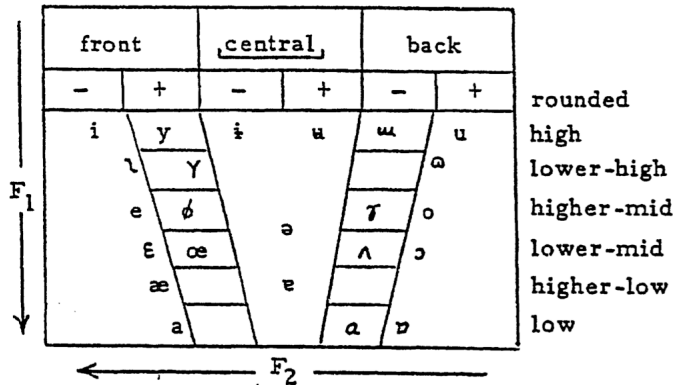
ごく簡単な例をまずいくつか見ておきましょう。付録の13 ページ目の3, Phonology のところから見ていきますと、ここでやっているのは基本母音の体系です。

Linguistic Universals and Variations: A Dynamic View

1. Sound — Phonology — Syntax — Semantics — Meaning
2. Two views of linguistic universals and variations

Output-oriented view
Process-oriented view

3. Phonology: Basic Vowel Systems



(Crothers 1978)

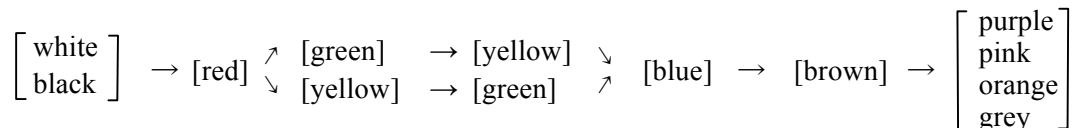
Type	No. of languages	Type	No. of languages	Type	No. of languages
? 2:0	1	6:0	7	9:2	7
3:0	23	*6:0	1	9:2''	3
4:0	13	**6:0	1	*9:2	1
4:1	9	6:1	29	9:3'	4
5:0	55	*6:2'	2	10:2	2
*5:0	1	7:0	11	10:3'	1
*5:1	5	*7:1	3	10:3''	1
**5:1	1	7:2	14	?10:3'''	1
***5:1	1	8:1	2	11:3	1
*5:2	1	?8:1	2	?12:3	1
		8:2	2		
		8:3'	3		

基本母音の体系は、言うまでもなく言語の一番基本の部分ですが、それがどうなっているか見ていきますと、まず、Phonology と書いてあるすぐ下の表は、これは仮に人間が聞き分けることができる基本母音がそこに出ている 23 個だけだとしよう、と。で、それが音素として出て来るのは、どうかっていうと、考えられる組み合わせとしてはどれか一つの母音だけを使うものから 23 全部使うものまでさまざまな組み合わせが考えられますが、実際にはある決まった組み合わせのものしか出て来ない。で、どれだけの組み合わせが可能かということ、最も簡潔に述べようとする、出て来た組み合わせを全部列挙するのではなくて、その右側に流れ図の形で書いてあるような捉え方をすると一番簡潔にその組み合わせの可能性を規定できるわけです。まず、基本母音を三つしか持たない言語では /a/, /i/, /u/ である。他の組み合わせの三母音体系というのはないわけですね。四母音になると、/a/, /i/, /u/ に加えて、二つの新しい可能性があって、右側へ行くと、/ε/ が加わって、それからもう一個増えると、そこへ /ɔ/ が加わって五母音体系になる。左側へ行くと /i/ が加わり、次に /ε/ が加わる、というふうに、矢印をたどって順次より複雑な体系になっていく。そして、このようにして出て来るもの以外の体系は許されない。例えば、母音三角形の左上の隅にごちゃごちゃと五

つの母音が出て来て、残りのスペースは全然使わないというような、そんな体系はどの言語にもないわけです。実際に出て来るのは、三母音だったらば、/a, i, u/ というふうにはスペース全体を広く使っている。もう一母音加わると、既存の二つの母音の中間あたりに割り込んできて、というふうにはですね、組み合わせ方のパターンが決まっている。そして、そういうパターンの背後にある法則性は何かという、まず人間が聞き分けられる音の体系があって、そしてそれをまとめてグループにして音素を作っていくわけですがけれども、その時の原理を Crothers は機能的分散 (functional dispersion) と呼んでいます。使えるスペースをなるべく有効に使う。一ヶ所にぐちゃぐちゃってかたまったら聞き分けにくいわけですから、なるべくばらして使う、っていう、ごく大雑把に言うと、そういうことなんですけど、その考え方を細かく厳密にして見ていくと、今その矢印で書いたような順番で付け加わっていくということが説明できるようになる。で、類型論者たちは、大人の言語の一般性を表すものとして機能的分散のような原理を立てていて、出力説的な枠組みのなかで考えているわけですが、この種の一般化は容易に動的な理論に組み込むことができます。つまり、/a, i, u/ という出発点とそこからの展開の仕方は定まっているが、出力としての母音体系がパラメーターなどの形で予め与えられているのではない、と考えることができます。そうすることによって、通言語的な多様性・画一性だけでなく、習得過程についても特定のな（反証可能性の大きい）予測をすることができるようになります。（この方面の研究、その後かなり進んでいまして、そこには挙げてありませんが、コンピューターシミュレーションで、やはり同じような結果が出て来るっていう、かなり面白い研究もあります。de Boer という人の研究で、これは本体の方の References のところに挙げておきましたから、興味のある方はご覧になってください。コンピューターに食わせる情報は言語学者が調べたことなんですけど、その情報を食わせておくと、コンピューターが自分で、この予測されたような母音体系に落ち着いてくるっていうんです。）

次に、語彙的意味の例を一つ見ると、付録 13 ページの 4、下の方ですね。

4. Semantics: Basic Color Terms



(Berlin and Kay 1969:4)

これも皆さんよくご存知の通り、基本色彩語の組み合わせ方というのは、でたらめになっているのではなくて、さっきの母音と非常によく似た型になっている。そこに矢印で書いてあるような、white/black (light/dark) という二つの区別し olmayan 言語があり、で、二つしか区別しない言語は white/black に限られるわけで、例えば、purple と pink の区別だけしかないみたいな、そんな言語はないわけです。それはちょうど、さっきの三母音だったら /a/, /i/, /u/ っていうのと同じなわけですね。それにもう一個加わるとすると、red が加わって、三色の体系になる。で、右に順番にずっと一個ずつ加わって行って、より複雑な体系になっていくわけです。この場合、出発点、特にこの早い方の、原色のところですね、白/黒に加えて、赤、緑、青、黄色が出て来る、その辺りまでは非常に多くの言語に出て来る。で、その後の茶色から右側へ行くと、段々少なくなるし、それから出て来る順番もまちまちになってくるらしいんですけど、この場合は、出発点が生理学的に決まっているわけですね。色彩を識別

する紡錘体の神経が、赤^{あかみどり}緑細胞と、それから青・黄の細胞から成り立っていて、原色の場合には、専門の細胞たちが、赤だったら赤緑細胞がわっと活動して、黄・青の方は静かにしているわけです。それから、青とか黄の時は、青・黄の方の細胞が、プラスになったりマイナスになったりして騒ぐわけですが、赤・緑の方は静かにしているわけです。これに対して茶色とか紫とかになると、両方の種類の細胞がある程度活性化する。それでその混合の仕方でいろいろ、中間っていうか、曖昧な色が出て来るわけです。そして左側の色ほど基本色彩語として区別する言語が多い。それから、子供の習得でも左側のものほど先に出て来る。赤ちゃんがいきなり「茶色」とかから入っていくのは普通ではない。この場合も、出発点とそこからの展開の仕方が予め定まっていると考えることができます。

このような例はよく知られている例ですけども、大事なのは、類似のことがあっちでもこっちでも出て来るということです。音韻論でも出て来るし、語彙的意味論でも出て来るし、そして実は統語論でも同じようなパターンが出て来ます。例えば品詞の体系がそうです。付録 14 ページの 5 にそのことが書いてあります。

5. Syntax: Parts-of-speech Systems

parts of speech	predicate use (p)	term use (t)	term modifier use (tm)	predicate modifier use (pm)
V	+			
N	+	+		
A	+		+	
D	+			+
A/D	+		+	+
N/A/D	+	+	+	+

	p	t	tm
1	V/N/A	V/N/A	V/N/A
2	V	N/A	N/A
3-5	V	N	A
6	V	N	
7	V		

	p	t	tm	pm
1	V/N/A/D			
2	V	N/A/D		
3	V	N	A/D	
4	V	N	A	D
5	V	N	A	
6	V	N		
7	V			

(Anward 2000)

Verb → Noun → Adjective → Adverb

6. Syntax: Constructions

話をうんと単純化して、V, N, A, Adv の四つについて考えると、四つとも揃っている言語もあるけれども、V (述語) だけの言語とか V と N だけの言語とか V, N, A だけの言語とかもある。しかし、A だけの言語とか N と Adv だけの言語とかはない。V から出発して、N, A, Adv の順でつけ加わった場合だけが許される。これは母音や色彩語の場合と基本的に同じパターンです。つまり、どこかにある出発点があって、そこから、ある法則に従って拡張している。品詞の場合の拡張の法則がどういうものかということは波及するところの大きい問題

で、別の機会に十分時間をかけて論じなければなりません。ここでは品詞の形成に動的な要因が係わっていることを示すかなり強い証拠を類型論の研究のなかから一つ見ておきます。

ハンドアウトの本体 2 ページ D2 ののちろを見と、右端のちろに **Stassen** という人名が出て来ますが、**Stassen** の 97 年というのは、*Intransitive Predication* という非常に優れた研究、類型論の研究の中で、最も優れた研究の一つと言ってもいいと思ひます。

D. Case Studies II: Data from Linguistic Typology

1. Demonstrative (Anderson and Keenan 1985, Diessel 1999, Dixon 2003; Lock 2001)
2. Syntactic categories (Kajita 2000:App 13-14, Stassen 1997)
3. Case (Plank ed. 1995, Nordlinger 2000; Nichols 1992, Cysouw 2002)
4. Reflexives and bound variables (Lee 2002a, b)
5. Negation (Kajita 2001:App 1-12)
6. Expletives (Thráisson 2003, Holmberg and Nikanne 2002, Perlmutter and Moore 2002; Holmberg 2000; Roberts 2001)

いろいろな面白い結果が出ていますけれども、その一つの結論は、動的な品詞分類との関連で特に重要です。単語を品詞に分類していく時に、ものを表す単語は N に、それから行為を表すのが V で、それから属性 (property), 例へば「大きい」とか「白い」とか、ものの性質をあらわす単語は A, というふうに通考えるわけで、もし習得の結果が予め決まてるとしたら、例へばそういうふうに決まてているということになりかねないわけですが、実際には先ほど言ったように、例へば形容詞がない言語もある。形容詞がないってのはどういことかて言うと、「大きい」とか「白い」とかていう意味を表す単語を N とか V として扱うわけです。英語や日本語は、N とも V とも違う第三の範疇 A というのを立てて、そこに属させているわけですが、A のない言語は N か V のどちかに振り分けるわけですね。Stassen が問題にしているのは、どうい場合に、属性語がどの品詞になっていくかといことです。それを四百何十という言語で調べたわけです。で、以前から言われていたのは、同じ属性て言っても、「大きい」とか「白い」とかていうのはいかにも形容詞的であって、そこへいくと、「速い」なんていうのは、意味から言うて、動きがあるわけですから、動詞に近いかもしれないとか、材質を表す形容詞は名詞の意味に近いとかいいうふうに、各属性語の固有の意味からして、どうい種類の属性語は A になりやすいとか、N になりやすいとか、そういうことは以前から言われたわけです。それはすぐに思いつくことですから。その類いのは出力だけを見てて考えられることなわけです。いろいろな言語の品詞分けを、ずうと大人の文法で見渡して、品詞ごとの単語の意味を考えたら、どうい種類の属性語は A になりやすいとかい一般論が出て来るわけです。その程度の見方といのは出力だけ見ててもわかるわけです。ところが、それだけでは、なかなか片が付かないことがある。Stassen のすごいところていうのは、属性語の品詞の区別が、何か他のことと関係してないか、他の点で、これこれの場合は意味と無関係に属性語が V になりやすいとか、V にはなりにくいとかて、そういうもう一個別の性質といのがないだろうかと思えたわけです。で、その性質として彼が言ったのは、動詞が形態論的な時制 (morphological tense) を義務的に持っているかどうか非常に大事なんだていことです。動詞の形態論的な時制ていうのはわかりますよね、英語にも日本語にもあるから。英語なんか見てると、時制は義務的にあるに決まてていると思ひわけですが、世界の言語では時制が義務的でないとい言語がいつ

ばいあるわけです。時制を持っているけども、随意的だとか、そもそも動詞に屈折接辞をつけるといふようなことは一切やらないという言語がいっぱいあるわけです。それで、今、単純化して、時制あり (tensed) の言語と時制なし (tenseless) の言語に分けて考えてみましょう。繰り返しますが、「時制あり」というのは形態論的な時制が義務的という意味で、「時制なし」というのは時制の意味を表すことができても、それを形態論的ではなくて、例えば独立の単語で表したり、あるいは形態論的な表現をするんだけど、それが随意であったり、そういうものは全部、「時制なし」とするわけです。で、世界中の言語をこの二つに分けて見ていく。東南アジアのも、南アメリカのも、あらゆるところのものをうまくサンプルを採って調べていくと、この属性語、つまり「大きい」とか「白い」とかいうような意味を表す単語が、時制あり言語では動詞にはならない。時制なし言語では動詞であっても構わない。で、動詞であってはならないっていうのは、残りの可能性は、AかNですよ。それで、Aを持っている言語の場合は、AになるかNになるかっていうのは先ほど言ったような内面的な意味によって振り分けたりなんかするわけですけども、Aがない言語、二品詞言語では、必ずNになる。そういう言語というのはいっぱいあるわけです。こういう類の相関関係を、最近の類型論者は見つけてきてくれてるわけです。誰も想像もしなかったような相関関係なんですよ。

「大きい」が形容詞になるか動詞になるか名詞になるかということと、その言語で動詞が必ず時制を形態論的に表すかということの間に、全ての言語において成り立つような関係があるとは思いませんでした。そういうことが実際にあるらしい。で、そういう類いのことっていうのは、動的な見方では非常に重要になってくるわけです。というのは、大人の文法を見るとN、V、Aという品詞がみんなわーっと出て来るんだけど、実際の習得の過程においては一遍に出揃うわけではなくて、ある順番で出て来る。まず品詞の区別のない段階から始まって徐々に進んで、二品詞の段階になるとNとVである。これは発達言語心理学の方でも、かなりわかっているわけです。で、ここまで来て、新たに属性を表す単語たちの品詞を決めようっていう段階になった時に、その段階での「現在の文法」において動詞が形態論的時制を義務的に持っていたら、属性語はVと結び付かなくなってしまう。で、残りの可能性の方に追いやられてしまう。義務的な形態論的時制が属性語を動詞というグループから排斥 (repel) するわけです。で、なぜそのような排斥力がここで働くのかというと、それは、基本的には、時制 (特に過去) の用法と属性語の意味とが相容れないところがあるからだと考えられます。つまり過去形の動詞はその動詞の表す事態を時間的に限定する時に用いられるのに対して、一方、「大きい」とか「白い」とかというのは、これは比較的安定した性質なわけで、ふつう時間的に限定されないわけです。そうすると、その段階で時制を動詞の形によって義務的に表すことを要求される言語においては、属性語は動詞と結び付きにくくなっていくことになります。ここで大事なことは、この説明で、習得の途中の段階の文法の特徴が決定的な役割を果たしているということです。つまり、N、Vは既に出ているが、属性語の分類はこれから、という段階で、「動詞の形態論的時制が義務的」という、普遍的に成り立つのではない特徴を持っていれば、次の段階で、属性語は動詞以外の品詞に分類される、というふうに、途中の段階の文法の特徴がそれ以後の展開に影響を与えているわけです。

以上、基本母音、基本色彩語、品詞を例として、広義の範疇形成において、動的な展開の法則が働いていること、特に現在の文法の特徴に基づいて次の文法の可能性が決められていくことを見たのですが、同じことは、範疇形成だけでなく、そのほかのさまざまな領域でも出て来ます。一例としてハンドアウト本体2 ページ D4 の再帰表現・束縛変数を見ますと、再

帰の意味を表す形式は通言語的に見ていろいろなのがあります。英語だったら、*John likes himself* というふうに、代名詞に印 (-self) を付ける。項 (argument) である代名詞に印を付けて、再帰性を表す。で、それが普遍的と仮定した上での束縛理論 (Binding Theory) であつたというふうに見えるわけですが、実際には、もっと多様です。言語によっては屈折接辞の一つとして「再帰」という接辞を動詞に付ける言語とかもあります。あるいは、日本語なんかは基本的には付加詞で表すわけですね。「自分で」というふうに。「自分」というのは、日本語では一番基本の層では項ではなくて、「自分で」という副詞表現から出発すると思います。「自分でしなさい」とか「自分でできる」とかいう「自分で」から入って、そこから広がっていくんだと思います。だから、「太郎ちゃんたら自分で叩いてるよ」の方が「太郎ちゃんたら自分を叩いてるよ」より先に言えるようになるのではないかと思います。それから、また、Thai とか Mayan とかでは、英語なら *John likes John* に当たるような言い方で再帰性を表す。これは、はじめは、二番目の *John* をふつうの指示表現 (r-expression) と考えて、束縛原理 C の問題と見なす人もいたんですが、Lee によると、二番目の *John* は再帰表現 (さらには束縛変数) だということで、実際、彼女があげている事実を見ると、そう考えた方がよさそうです。つまり、先行詞と同じ名詞をそこへそのまま持ってきて再帰性を表す、そういう言語がある。というわけで、再帰表現にもこういう多様性があつて、この多様性はどこから出て来るのかというと、先ほど「自分で」でちょっと言ったように、その言語のより基本的な段階で、どういうものが許されているかによるわけです。Thai の場合は、一切、屈折 (inflection) がない言語です。だから動詞の活用もないので、動詞の活用で再帰性を表すという可能性は初めから排除されているわけです。それから、項に何か印を付けるというような、そういう形態論的な操作も許されていない。要するに孤立語です。形態論がほとんどない。one morpheme, one word っていうような言語である。で、そういう特徴がより基本的な段階で確立しているから、他の言語なら許されるさまざまな可能性が排除されて、残った可能性のなかから、先行詞をそのまま繰り返すことによって「先行詞と同じ」という意味を表すという方法が選ばれたこととなります。(既存の名詞表現をこのような仕方ですべて「流用」する方が、例えば新しい小詞 (機能的な自立語) を導入するよりも、再帰性の表現形式としては、優先されたこととなります。なぜ優先されるのかという問題も重要な問題ですが、ここでは立ち入りません。)

次にハンドアウト本体 D5 の否定 (negation) は、付録の初めの方に 10 枚ばかりのところ、詳しくやっています。それで、その付録の初め 10 枚ばかりのところ、動的文法理論のより細かな仮説をいくつか並べてあるんですが、ちょっとそれを説明する時間がないですから、興味があればのちほどご覧いただくことにして、今、ここで説明しておいた方がいいことだけ付け加えておきます。先ほど、習得モデルの図を見ましたけれど、あれをもうちょっと詳しく言うと、最初の段階で、言語習得が始まる前の段階で、言語で用いられる表現形式のリストが、順位付きで与えられている。それから、言語によって表現できる意味の候補が、やはり優先順位を付けて与えられている。つまり、もう、今すぐにでも表現できるような意味から、そうではないものまで、言語習得が始まる前の子供の経験や、それから先天的なものが合わさって、言える事柄がある程度決まっていると仮定します。そして、その使える表現形式と表現できる意味を結び付ける仕組みがあつて、これも始発状態になっている。

で、実例をちょっと見ておきますと、付録の 2 ページ目の [A] というところ、それが初期に表現できる意味の候補の群です。

[A] Basic semantic/pragmatic elements and configurations ordered in terms of expressibility (the inventory and the order dynamically augmented and modified in the course of learning)

[1] Manipulative Activity Scene (Slobin 1985)

‘Manipulative activities involve a cluster of interrelated notions, including: the concepts representing the physical objects themselves along with sensorimotor concepts of physical agency involving the hands and perceptual-cognitive concepts of change of state and change of location, along with some overarching notions of efficacy and causality, embedded in interactional formats of requesting, giving, and taking.’ (p. 1175)

Accusative marker initially restricted to direct objects that refer to objects acted upon (changed, etc.)

[2] Nonexistence of an object or substance as the result of total consumption or of someone taking it away + a speech act of exclamation, requesting, and the like.

[3] Rejection

例えば、Manipulative Activity Scene と書いてありますが、これは有名な Slobin の基本的な他動詞構文で表せる意味ですよね。そこに詳しく書いてありますが、非常に複雑な意味内容を持っている。「叩く」とか、「壊す」とか、そういうような、そういう場面、それを非常に早い段階で表せるようになる。で、同じ他動詞構文でも、「好む」とか「脅かす」とかって、そういうのは後になるわけで、「叩く」とか、「壊す」とか、そういうのが早いわけです。そういう特定の複雑な意味のかたまりが各々一つの表現可能な候補としてあると考えます。もう一つの例は [2] のところで、「今まで見えてたものが無くなっちゃった」とか、「ミルク飲んじゃって無くなっちゃった」とかって、そういう、ある種の不在 (nonexistence) を表す意味のかたまり、これも非常に早くから言えるように準備ができています。それから、拒否 (rejection) とか禁止 (prohibition) とか、つまり「いや」とか「だめ」とかいうような、それぞれ分析すると、非常に複雑な意味のかたまりなんですけども、そういう意味の固まりが非常に早い段階で言えるようになる。これは、先天的なものがかかなりあるわけです。「いや」とか「だめ」とかに当たるような意味内容というのは、子供は早くから泣き声や手足の動作で表しているわけですから。それから、同じようにして、例えば、指示詞 (demonstrative) の「これ」とか「あれ」とかに当たるような、何かを指して、そこに相手の注意を引くっていう、そういう意味の固まりも非常に早い段階である。そういう意味の固まりの候補たちがこの中に入っていると仮定します。

次に、使える表現形式の候補もそこに入っていて、それが付録の 5 ページ目の左側の方に例が書いてあります。全然形がないものから、有形のもの、で、有形のものの中ではかぶせ音素 (supra-segmentals) です、イントネーションとか。それから節音 (母音・子音) を使うもの。で、節音を使った表現形式の中に、語順 (word order) とか屈折 (inflection) とか付属語 (clitics) とか小詞 (particles) とか補助詞 (auxiliary), 語彙的語 (lexical words) とか構文 (constructions) とかいろいろあるわけで。これらの表現手段、いろいろ可能性としては与えられているんだけど、それらに優先順位が付けられていて、一番早い段階で使われるのは無形と、それから有形だと、イントネーションなんかの基本形と、それから語 (word), まだ品詞やなんかの区別なしの単純な語です。そういうところから出発して、その他のものはまだ使えない段階です。そういう順位付きで、可能性が与えられている。

TYPES OF FORMAL MARKING	Pos Decl	Y-N Qsn	Pure Neg	(Passive)
φ	+			
Overt				
Supra-segmentals		+		
Segmentals				
Word order		+		
Inflection		+	+	
Clitics		+	+	
Adjacent to V				
# <u> </u>				
[X <u> </u>				
<u> </u> #				
Particles		+	+	
Auxiliary V			+	
Lexical words			+	
V				
A				
N				
‘Constructions’				+

(Sadock and Zwicky 1985, Zwicky 1994; Dahl 1979, Payne 1985. Cf. Thompson 1995.)

それから、形式と意味を結び付ける仕組みがあって、これが先ほどの 2 ページ目の [C] のところに書いてあるもので、例えば形式と意味を結び付けなさいという Associate とか、そうやってできた形式と意味の組み合わせ、まあ、記号 (symbol) になるわけですけど、それがいくつか出て来たら、部分的な類似を分析しなさい、という Analyze っていう操作、これで屈折なんかが析出されてくる。それから Combine っていう操作があって、そういう形式と意味の複合同志を結び付けて、句やなんかを作っていく操作とあって、そういういくつかの基本操作がずっと与えられていて、それらも、活性化される順番が決まっている。早い段階では全然使えないようなものもある。

- [C] Basic processes that associate forms and meanings, analyze the form-meaning composites, combine them into larger composites, categorize the composites, and suppress elements in the composites.

The processes are characterizable in (a) positive, (b) intensional, and (c) interative (i.e., cross-modular) terms, and function in a (d) stochastic, (e) cumulative, and (f) thresholded, fashion.

Implicational universals in static, output-oriented theories, e.g., “If a language has property P’, then it also has property P”, cannot replace the dynamic processes of Format (II).

- 1) The fact that P appears earlier than P’ in the course of learning would have to be regarded as accidental.
- 2) In those cases where P disappears in the course of development, the implication no longer holds in the output grammar, thus making it impossible to capture the restrictions on P’ in terms of implicational universals.

で、最初の段階はそうなんですけども、ここへ、最初のデータが入力されると、最初の段階の文法、形式と意味を結び付けたものが出て来る。だから最初は一語一語の単語を覚えるみたいな単純なところから出発するわけですね。そうなんですけども、その結果が言語習得機構にフィードバックされる。で、そういうステップを繰り返していくうちに、初めは使いに

くかった、順位が下の方だった表現形式も、ある種の文法が形成されてくると、段々、それが順位が上がっていったり、あるいは引き続き、使いにくいままだとか、さらには順位が下がったりとか、そういうことが起こってくるわけです。で、そんな表現形式の使い易さ、使用可能性の順位なんてことをどうやって調べるのか。その調べ方ですね。それは、一つには、意味側にも、基本的な早くから出て来るものとそうでないものがあるから、その早いもの、早い意味が、どういう形式で表されるかということを通言語的に調べていけば、そうすると、早い段階で使いやすい表現形式というのが自ずから決まってくるはずです。もうちょっと具体的に見ますと、付録の5ページ目の、今度は意味側で、例えば肯定平叙文の意味を表わす場合、*yes-no* 疑問を表す場合、純粹否定の意味を表す場合、それから受身を表す場合、っていうようなのを考えてみると、意味側で早く出て来るのとそうでないのと、順番がある程度わかるわけです。例えば、純粹否定というのはかなり遅いんです。純粹否定というのは、先ほど見たような、「ない」とか「だめ」とか、「いや」とか、そういうのではなくて、一般的な文否定のことです。「ない」とか「だめ」とかは、純粹否定の意味も含んでいるけれども、他の要素もいっぱい組み合わせると、非常に複雑な意味複合体になっているわけです。その全体をまとめてだったら、早くから表せる。だから、「禁止」、「拒否」などは非常に早くから子供が表すことができる。これも発達言語心理学の方の調査で非常にはっきりわかっているわけです。「いや」とか「だめ」とか「ない」とか早くから出て来るわけです。だからといって、純粹否定がもう出て来たわけではないわけです。純粹否定というのは、普通の否定文、あらゆる否定文に出て来るもので、英語で言うと *not* で表し、日本語でいうと、「食べない」っていうような「ない」とか、「赤くない」っていう、その「ない」ですね。で、そういう抽象的ものは、そんなに早くは出て来ないわけです。それらは「禁止」とか、あるいは「不在」とかって、そういう意味のかたまりの中に入っている「否定」という要素が抽出されて、そして、「禁止」を表していた表現形式と結び付いたり、「不在」を表していた形式と結び付いたりする。日本語の場合は、「不在」を表していた形式と結び付くわけです。言語によっては「だめ」を一般化したり、「いや」を一般化したりするわけです。ともかく、大抵はそういう早い段階で使える意味複合体の言葉のどれかが、純粹否定辞としても用いられる。で、そこにもうはっきり展開の法則性が見られるわけですね。意味の複合体のなかから一つの要素を抽出して、それに元の形式を与えていく。で、そういうことを考えると、純粹否定というのがかなり遅いのもうなずけます。ですから、純粹否定が出た段階では肯定平叙や *yes-no* 疑問はもう出ている。そうすると、それらの意味を表すのに使った形式は純粹否定用には使いにくくなるだろうと考えられるわけです。それはどうしてかって言うと、例えば上昇音調とか下降音調とかっていう、早い段階で区別できるイントネーションっていうのは、割と限られているわけです。細かな、微妙な意味を初めからイントネーションでいろいろ区別し分けるといことはあまりないわけです。で、その数少ないイントネーションが純粹否定より基本的な *yes-no* 疑問に取られてしまったら、純粹否定はそれを使えなくなってしまう。そうすると、それ以外の表現形式を使わなければいけなくなる。で、そうすると今まで言ってきたような禁止とかなんかで、既に一部分使われているものを借用していくということが行われる。で、そのところ、本当は補文構造との関係でもっと細かい予測ができるんですけども、ちょっと省略して、大筋は、表現できる意味の方で順番があると、それを基にして、使える表現形式の順番についても推測ができる。そして、もし表現形式側で、順番についての何か独立の根拠があれば、それももちろん証拠になるわけです。例えば、調音生理学的に、基本的なイントネーションは早くから言えるが、節音の細かいところは言えないとか、というようなこ

とがあったら、それは、そっち側からの独立の証拠でもって順番が決まっていくことになります。で、いずれにせよここで重要なのは、ある形式がどの程度の使用可能性を持っているのかということは、初めから終わりまで、いつでも同じ程度の使用可能性が決まっているのではなくて、前の段階でどういう形式と意味の組み合わせが既にあるかによって、使用可能性がその後変わってくる。例えば基本的な音調は早くから使用可能だけれど、いったんある意味と結び付けられると、それ以外の意味の表現手段としては順位がぐっと下がってしまう。事実、否定を音調で表すような言語は知られていない。というような説明をしようと思うと、前提として、現在の文法が次の文法の可能性を左右するという、動的な考え方を受け入れざるをえなくなります。

否定については、まだその他に、否定要素をどこに置くかっていう、文頭に置くか、助動詞にくっつけるか、日本語みたいに最後に持ってくるか、そういう配置についても非常に多様性がある、その多様性も、実は、かなりの程度まで動的に説明ができる、ということが8ページのあたりの例で書いてあります。

付録 p. 8

S-PERIPHERAL NEG

1. S-Final Neg

S V O Neg: Austro-Asiatic: Margi, Tera; Niger-Congo: Gbeya, Jukun, Sango (Dahl 1979: 101); Dialects of Brazilian Portuguese (T. Yoshino, p.c.)

S O V Neg: Child Japanese (Sano 1995)

Taberu nai, Haitta nai, Aketa nakatta, Okkii nai, Oichikatta nai

2. S-Initial Neg

2.1 Child English (Bellugi 1967, Déprez and Pierce 1993; Bloom 1970, Drozd 1993; O'Grady 1997)

No mommy doing. David turn.

Child Korean (Han and Park 1995)

An S V (Adult: S an V). Cf. S an O V (Adult S O an V)

2.2 Colloquial Speech

Finnish: Et sinä mene. (Cf. Sinä et mene.) 'You don't go.'

Bowerman (1973: 234-235)

2.3 Main Clause vs. Subordinate Clause

Basque (Laka 1990)

Nadëb (Weir 1994)

2.4 Special Constructions

English: Negative Inversion

Not-Topic (Culicover 1999)

No way anybody is gonna tell me what to do. (Laka 1990: 39)

Japanese: Arimasen yo, sonna mono.

Kimasen desita yo, dare mo, gakusei wa.

			L1	L2	L3	L4	Lx
Child Lg			+	+	+	+	-
Adult Colloq			+	+	+		-
Noncolloq	Basic Construction	Main Cl	+	+			-
		Subord Cl	+				+
	Special Construction				+	+	+

その説明の原理は 7 ページのあたりに書いてあります。で、付録の 2 ページ, 7 ページのあたりのことは、一般理論の中に書かれる事柄で、それがここでの例以外のところでも、いろいろ使われるはずのものになります。

付録 p. 7

(III) A Process-Oriented Alternative

[D1] Two basic modes of encoding: expressive vs. expository

Expressive: spontaneous, casual, speaker-based (e.g. exclamation)

Expository: 'planned', careful, hearer-based

[D2] Expressive mode precedes expository mode in development.

(D3) Two principles of word order

a. Newsworthy First (Tomlin and Rhodes 1979, Mithun 1992)

A consequence of the expressive mode of encoding.

Focus of attention sent to the motor system first, other activities inhibited or delayed.

(Neurophysiological basis not inconceivable.)

b. Given-New

A consequence of the expository mode of encoding.

[D4] Some illocutionary forces (e.g., mands, rejections, prohibitions; exclamations) are more strongly connected with the expressive mode of encoding than others are.

[D5] Language learning is conservative: it proceeds by minimal steps, changing the present grammar only minimally.

Introduction of a new meaning, introduction of a new form, establishing a new form-meaning association, combining two form-meaning composites, analyzing a whole into parts, and dropping an element from a composite each counts as a new step in learning.

(D6) When a new semantic element X is introduced as a property of a semantic constituent Y, the form X' that corresponds to X is placed (a) at the periphery of the form Y' that corresponds to Y, or (b) on the head of Y'.

(D7) Pure negation, when it is first distilled from such conflated composites as "nonexistence", "rejection", "prohibition", and "short reply", is a property of the main clause.

(D7) Main clauses, not subordinate clauses, are the locus of those forces that are strongly connected with the expressive mode of encoding.

[D8] Localization by insertion. (Kajita 1977)

E.g. More racial violence will break out this summer in New York, Chicago, and, possibly/I guess, in Los Angeles.

He has made a possibly too generous offer.

付録 p. 2

[A] Basic semantic/pragmatic elements and configurations ordered in terms of expressibility (the inventory and the order dynamically augmented and modified in the course of learning)

[1] Manipulative Activity Scene (Slobin 1985)

‘Manipulative activities involve a cluster of interrelated notions, including: the concepts representing the physical objects themselves along with sensorimotor concepts of physical agency involving the hands and perceptual-cognitive concepts of change of state and change of location, along with some overarching notions of efficacy and causality, embedded in interactional formats of requesting, giving, and taking.’ (p. 1175)

Accusative marker initially restricted to direct objects that refer to objects acted upon (changed, etc.)

[2] Nonexistence of an object or substance as the result of total consumption or of someone taking it away + a speech act of exclamation, requesting, and the like.

[3] Rejection

[B] Basic means of expression ordered in terms of availability (the inventory and the order subsequently undergo dynamic augmentation and modification)

[1] Segmentals and suprasegmentals

[2] Linear order

[C] Basic processes that associate forms and meanings, analyze the form-meaning composites, combine them into larger composites, categorize the composites, and suppress elements in the composites.

The processes are characterizable in (a) positive, (b) intensional, and (c) interactive (i.e., cross-modular) terms, and function in a (d) stochastic, (e) cumulative, and (f) thresholded, fashion.

Implicational universals in static, output-oriented theories, e.g., “If a language has property P’, then it also has property P”, cannot replace the dynamic processes of Format (II).

1) The fact that P appears earlier than P’ in the course of learning would have to be regarded as accidental.

2) In those cases where P disappears in the course of development, the implication no longer holds in the output grammar, thus making it impossible to capture the restrictions on P’ in terms of implicational universals.

以上、文法の周辺寄りの部分だけでなく、中核的な部分についても、過程説的な見方が必要だということを、簡単な例で見えてきました。これ以外にもさまざまな事例がありますし、また、類型論の方で言ってる含意的普遍 (implicational universal) ではダメなのかとか、いろいろ触れたいことがあります。時間がだいぶ超過致しましたから、そこまでにしますが、ポイントはおわかり頂けたでしょうか。習得の結果出て来る大人の文法の特徴だけを使って、それだけを見て可能な文法を定義するには限界がある。展開の法則自体に普遍性を求めるべきではないかという、そういう考え方です。興味がある方はどうぞ、考えをお聞かせください。